

2-8			
主題	調理活動がもたらした利用者と職員の変化		
副題	ピンチをチャンスに変えた調理活動		
キーワード1	認知症	キーワード2	調理活動
研究期間	1ヶ月		

法人名	社会福祉法人フロンティア		
事業所名	高齢者在宅サービスセンター 山吹の里		
発表者	黄野 千寿 (こうの ちず)	アドバイザー	相澤 和彦 (あいざわかずひこ)
共同研究者：なし			

電話	03-3981-5067	FAX	03-3981-5061
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	特養併設型の認知症対応型デイサービス「ほのぼの広場」、定員12名。帰宅願望、徘徊等で他のデイサービス利用が困難な方、混乱が激しく不穏になることが多い方が全体の約20%程度。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

築20年を経過した山吹の里はH25年3月からH27年3月までの期間、サービス提供を継続したまま、施設大規模改修を行った。

そのような中、H26年10月14日から11月13日までの1ヶ月間、厨房改修工事の為、食事提供が出来ず、外部からの弁当で対応することが決定。それに伴い、弁当の仕分けの場所として認知症対応型デイサービス「ほのぼの広場」のフロアが使用されることになり、「ほのぼの広場」の利用者は活動の場所を施設玄関前の喫茶コーナーに移すこととなった。

環境変化に敏感な認知症利用者の混乱が予想される中、喫茶コーナーには仕切る壁もなく、また玄関から数メートルの場所でのサービス提供に、職員達は大きな不安を感じていた。無事故で1ヶ月を乗り切る為、利用者には不安を与えず、活動に集中できる時間を増やす取組みを検討することとした。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

- 利用者の混乱を軽減することを期待して集中できる活動を提供した。活動内容は食事の質の低下を補うため、自分達で調理することとした。
- 調理活動が手続き記憶を利用した生活リハビリの一環となること、そして調理を通じて他者からの承認欲求を満たすことにもつながるのではないかと考えた。
- さらに副次的な効果として、利用者同士が協力して料理を作り上げることで、より一層の連帯感が生じ、帰属意識の醸成からくる帰宅願望の軽減などの効果も期待した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- 全利用者を対象に、調理活動の意義、メリット・デメリットを説明。納得の上で同意書の提出を依頼。全員から参加同意書の提出があり、10月14日から調理を開始。
- 見守り強化のため、法人内に職員ボランティアを募集。各施設から職員が手伝いに来て、活動の様子から学んだことを各現場に持ち帰った。
- 毎日の午前の活動として汁ものづくりを実施。作業能力に合わせて役割を分担。利用者はきっかけを支援するだけで、手続き記憶を利用し、包丁を使う作業も上手にこなした。そこで活動の範囲を広げ、週1回は昼食の全てを利用者と作った。餃子、ちらし寿司、お好み焼き、おいなりさん、寄せ鍋などに挑戦した。
- 毎日の汁もの作りは作業療法の一環として費用を施設が負担。週1回の昼食作りは食材費を参加人数で割り、利用者の負担とした。
- 家庭の食卓をイメージし、茶碗を持参頂き、ご飯は容器から出し、温めてから盛り付けた。
- 各利用者の能力をアセスメントし、出来る事をみつけ、全員が調理工程に関われるように配慮した。

《4. 取り組みの結果》

- 職員が一番心配していた環境変化による混乱や外出事故は起こることなく、利用者は調理に集中し、1か月間の喫茶コーナーでの活動は無事終了した。
- 特に女性利用者が調理している時に見せた表情は、自信と喜びでいっぱいだった。
- 利用者のほとんどは、既に食べる時には調理したことを忘れていたが、その後の行動に変化が見られた。おやつが終わると何度も玄関に向かっては戻されることを繰り返していた利用者が、調理活動後から配膳や片づけを自分から行い、満足そうに過ごした。
- 残食がほとんど出なかったことから、活動中の楽しそうな様子と美味しそうなおいに利用者の食欲が刺激されたことが伺える。

《5. 考察、まとめ》

今回の調理活動により、仮説以上の結果を得ることが出来た。

- 経管栄養のYさんは調理活動中に唾を呑み込んだことがきっかけとなり、少量ずつだが経口摂取可能となった。自宅でもヨーグルトやゼリーを楽しめるようになった。
- 職員の対応に変化が現れた。利用者が出来る喜びを望んでいると学んだ職員が、徘徊する利用者にただ座ってもらうのではなく、役割を提供することで、いきいきと活動に集中する利用者が増えた。
- 玄関前での調理活動は多くの人目に留まり、一般デイや特養にも取組みが広がった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本発表を行うにあたり、ご本人・ご家族には口頭にて確認をし、研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答を持って同意を得たとした。

《7. 参考文献》

なし

《8. 提案と発信》

はじめは利用者の混乱の軽減を目的として考えた活動であったが、調理活動が利用者にとって自己実現の場になった事で自信や満足感が得られ、「そこにいたい」と感じて頂けたのではないだろうか。

私たちは何もせずおいしい食事が出てくる事が良いサービスだと思い込み、利用者も提供されたサービスを受入れなければならない立場だと思い込んでいるのではないか。人生の先輩である利用者は当然、私たち職員より経験豊富であり、利用者本人も自分の方が知恵を持っていると思っている。しかし、身体機能の低下や認知症による理解力の低下により自信を失い、消極的な生き方を受入れたのかもしれない。利用者は自分達で調理することで、職員の想像を超えた能力を発揮した。その満足感や達成感こそが私たちが提供すべきサービスなのではないだろうか。